

差別がなくなる日まで

中 一

「おい、耳の聞こえないやつ。」

僕は衝撃を受けた。小学校六年生のときに同級のAさんにそう言われた。軽度の難聴なので、三歳半から補聴器をつけているが、初めて言われたのだ。難聴のことをからかわれることがあるとは聞いていたが、まさか六年間一緒に過ごしてきたクラスメイトに言われるとは思わなかったのだ。だから、言われたそのときはびっくりして、頭の中が真っ白になり、その場に立ちつくしていた。涙も出なかった。

家に帰り、僕は母に言った。

「もう学校に行きたくない。」

母は理由を尋ねたが、僕はしばらく答えなかった。母は、僕が話し出すまで待つてくれた。

やっと話をする気になり、今日起きた出来事を伝えた。すると母は、

「悔しい。何でそんなことを言われなければいけないのか。」

と悔しがっていた。そして、だんだんいろいろな感情が込み上げてきたのか、

「悲しいね。悔しいね。さびしいね。」

と言って泣き出した。妹も泣き出した。そして、僕も悔しくなり、三人で一緒に泣いた。

大声を出して泣いた。何よりも、一年生のときからの同級生に言われたことが、悲しかった。

その後、気分転換をしに外に散歩に行った。

小さい頃からいろいろな人に助けってもらってきたことや、自分たちで努力してきたことを話しながら歩いた。いっぱい話して、少しだけ立ち直れた気がした。

「目が悪いからメガネをかける。耳が聞こえにくいから補聴器をする。ただそれだけのこと、自信をもって、堂々と。あなたなら大丈夫。」

と母が言ってくれた。

次の日、不安な気持ちで学校へ行った。仲のよい友達に昨日起こったことを話した。すると

「ひどいな。あいつ最低だな。」

と言った。僕は「同じ気持ちをもってくれる仲間が周りにいてくれたんだ」と思い救われた。そして、先生にも話をした。先生は、

「この学年にそんなことを言う子がいるのは私にも責任があります。」

と言つて、話し合いの場を作ってくれた。僕は、Aさんに、今まで頑張ってきたこと、苦しかったこと、でも、それを乗り越えてきたこと、家族や先生、友達みんなの支えがあつて、ここまでやつてこられたことを話した。もちろんAさん本人にも声をかけて、助けてもらつてうれしかったことがあると話をした。Aさんも真剣に聞いてくれた。しかし、なぜそのようなことを僕に言ったのかは、口に出さなかつた。

もう一人、Aさんがからかつていた子がいた。支援学級に通うBさんだ。Bさんは、みんなとは少し変わった話し方をするが、Bさんの話し方をまねて笑つていた。僕は

「やめなよ。自分がやられたらいやでしょ。」

と注意をしたが、
「うるせえ。だまつとけよ。」

となかなか耳を傾けてくれなかつた。Bさんも、自分と同じ人間だ。だから許せなかつた。僕は、どうしてそんなことができるのだろうと、疑問に思った。そのからかいは、毎日のように続いた。

何度も注意をしたが、同じことの繰り返しで、なかなかやめてくれなかつた。しかしあきらめずに何度も言い続けると、次第に減つてきた。

世界には僕と同じ難聴の人の他に、手足が不自由な人、目の見えない人等、いろいろな障害のある人がいる。けれど、それはその人の個性である。その人自身がそう決めてなつたわけではない。だから、その人を決して責めたり、差別をしたりしてはいけないと思う。何よりも大切なのは、人として、言つて良いことと悪いことがあるということだ。

同じ人間なのだから、それを心がけなければいけないと僕は思う。まずは、みんな同じ命をもっているということをつからなければ、差別はなくなるらないと思う。

たしかに、僕には難聴という障害があり、自分の努力も必要だが、みんなにたくさん支えてもらっている。今回乗り越えられたのも、周りの人のおかげだと思ひ感謝している。だからくじけずに、前に進んでいける。もし、だれかに体に関することを言われても、友達や家族など、周りの人たちに相談すれば、きっと協力してもらえらるから、

一人で抱えこまないことが大切だと思う。それでも言われたら、言い返せばいい。そして感謝の心を忘れずにいよう。いつか差別がなくなる日まで。